



Vision

学会出席のすすめ

順天堂大学名誉教授，東邦大学客員教授

大地 陸 男

国際生理科学連合IUPSが初めて日本で開催されたのは私が大学院2年生のときであった(XXIII IUPS, 1965)。XXXVI京都IUPSは5年後に近づいている。来年は3月末から4月上旬にSan DiegoでXXXV IUPSが開催される。この機会に国際生理科学連合大会IUPSの様子を体験的に述べさせていただきたい。

東京のIUPS会場は文部科学省に近い虎ノ門の国立教育会館であった。ロンドン大学に留学し筋生理学者のArchibald V Hillに学んだ東龍太郎都知事が開会式に出席した。講演ではAlan L Hodgkinの聴衆としての厳しい質問にはいささか驚いた。Bernard Katzの日本のシンポジストに対する温かい賞賛は、講演者の論文を勉強していたから納得できるものであった。さて私も大学院に入って直ちにIUPSをにらんだ実験に参加し、グループの研究の一部を講演することになった。ポスター発表が行われるようになったのはかなり後のことである。自分の講演は成功とはいえなかったが、それは英語のせいではなく、まだ本当に発表したいほどの内容になっていなかったためであり、そこまでの努力が不足していた。サテライトシンポジウムでは、私は伊藤正男先生がJohn C Ecclesと企画された小脳のシンポジウムに参加した。小脳の神経生理学の幕開けともいべき革新的な発表が、仲間同士の親しさの中で行われ、歴史を画するシンポジウムであった。なお東京のIUPSについては、昨年小幡邦彦生理研名誉教授

もVisionに書いておられることに気づいた。

海外のIUPSへの出席は、昔もこれからも大変な出費を要する。従って毎回出席したわけではないし、将来も毎回出席するとは限らない。1971年のミュンヘンIUPSでは、大学生協チャーターの飛行機を利用し、いろいろな大学の若い学生たちと交流しながら飛んだ。ミュンヘンには数日早く到着し、IUPSが割り当ててくれた街中の宿に、イスラエルからの青年と同宿した。彼は合理的な考えと行動をする好青年で、電動ハブラシをはじめてみた。一緒に工事中のオリンピックスタジアムを見学に行ったり、彼の仲間同士の情報交換に加わったりした。この学会では大きなビアホールのHofbräuhausを借り切ったパーティが華やかであった。当時はイギリスに行くにはビザが必要だった。JPに論文を発表した若い生理学者に訪問許可の手紙を書いてもらい、本当に訪問した。他にはスウェーデンやイタリアの学者からも許可が下りたがイギリスが長くなった。まずロンドン大学の実験室を案内され、元同僚にも紹介してもらった。次にLeicester大学の彼の実験室で3週間共同研究し、一仕事となった。実験を行うことになったのは、生協のチャーター機の帰国便が遅かったのが一因だったと思うが、イギリスのこともいろいろ教わり幸運だった。このような若いときのことの方を、刺激も強かったためかよく覚えている。

パリのIUPSにも友人がおり行きたかったのだ

が、自分の貯金は父の選挙資金に回ってしまった。ブダペスト、ヘルシンキ、グラスゴウのIUPSはミュンヘンのと同じくコンベンション施設で行われた。前回のクライストチャーチIUPSはコンベンション施設が小さく、付近の別の施設も使い複雑だった。シドニーとバンクーバーは大学が大きく、大学の施設のみで行われた。シドニーではあオペラハウスにも集合したが、グラスゴウでは一部が大学だった。セントピーターズバーグIUPSは半分以上が大学だった。この街が芸術や歴史的資産に富むことはよく分った。ブダペストとクライストチャーチでは大学のドミトリーに泊まった。ドミトリー滞在は思い出深いものである。ニューハンプシャーで行われるゴードン・コンファレンスのドミトリー滞在も思い出される。出席した海外のIUPSの中では、私はシドニーとバンクーバーが特に気に入った。自分の研究領域のactivityが高い時期に行われたことや、興味あるサテライトシンポジウムに出席した影響もあるから、あくまでも個人的な感想である。

IUPSは自分の研究の発表の場であり、関連分野の最新の研究を知る場であり、生理学をはじめとして科学全般の知識を幅広く獲得する場であ

る。そのためには会期中は原則として常に学会に出席し、自分の専門以外のも含めてできるだけ多くの講演を聴く。ポスターは会場の隅から隅まで見たい。余裕があれば関連するサテライトシンポジウムにも出席する。パーティにもなるべく出席する。かくして研究を仲立ちとして多くの友人が得られることになる。

IUPSに限ることではないが、学会で得られた知己は、研究を中心に人生を組み立てる場合、人生を豊かにしてくれる。私にとっては、大学院生ではじめてから名誉教授になった今まで、実験はいつでも面白いものであった。もっぱら微小電極法やパッチクランプ法でやってきたが、そこには生きた細胞があった。技術的な成功だけでも満足感がある。実験による発見は*a priori*に生活全般を生き生きとしてくれた。日本では定年を迎えると実験の楽しさを味わうのは一般に困難である。これは年齢にかかわらずまだ実験できると思うので制度的に改革を要すると思う。個人的には学会でえられた友人たちが助けてくれることもある。学会からは知識・情報のほかに、知らず知らずに大切な人間的なつながりも得られるのである。